

通常の学級における特別支援教育

～地域支援チームと連携した有効な学校支援の方策～

特別支援教育研究会議

指導主事 宮川 淳子 研究員 村越 淑美¹ 谷戸ゆきみ² 高橋 晴代³ 杵渕 敬子⁴

I 主題設定の理由

1 問題意識

川崎市立小学校では、特別支援教育への理解が深まるとともに通常の学級において支援を必要とする児童への気づきが高まり、それぞれの学校、学級で取組が進められている。今年度研究の対象となる川崎市立A小学校（以下「A小学校」とする）でも、児童数が急増し、それに伴って支援を必要とする児童の人数が増えて支援のニーズが多様化し、また、経験年数が少ない教員が増えている中、適切な支援を模索しながら取り組んでいる。

川崎市では、「川崎」「幸」「中原」「高津」「宮前」「多摩・麻生」の6ブロックに分け、市内小・中学校への学校支援として、地域支援チームの活動を行っている。チームのメンバー構成は、特別支援学校地域支援部、特別支援教育推進モデル校コーディネーター、通級指導教室担当者、巡回指導員、ブロックを担当するセンター指導主事である。地域支援チームの主な活動は、チームのメンバーによる対象の児童生徒の授業観察や支援の内容の検討等である。

A小学校では、昨年度から地域支援チームが継続的にかかわり、個別のケースについて授業参観や個別の指導計画の作成などに取り組んできた。1事例について深く検討することができた反面、事例を多く扱うことができなかった。支援を必要とする児童が多いこと、個々のニーズが多様であることを考えると、支援が必要なすべての児童について十分に時間をかけて検討することは実質的に難しい。

そこで、個を包括する学級集団に焦点を当てて、学習しやすい環境や集団を作るための有効な方法を探ることにより、個への支援を活かすことにつなげたいと考えた。

2 研究の仮説

学級の中で支援が必要な児童を念頭に置きながら、地域支援チームと学校が連携して、授業を支える基盤を作るために有効な手立てを探っていくことはできないだろうかと考えた。学校独自の「授業のチェックリスト」を作成することで、教員一人一人が授業を見直していく機会となり、誰もがわかりやすい授業につながるのではないかと考えた。また、昨年度より市内で全面実施されている「かわさき共生・共育プログラム効果測定」（以下「効果測定」とする）を学級づくりのアセスメントとして活用して、誰もが安心できる学級を作るために役立てたいと考え、以下の研究仮説を設定した。

地域支援チームを活用することによって、教員が自らの授業を見直し、学校全体で特別支援教育に取り組み、一人一人の児童生徒にとってわかりやすい授業や教室環境を作ることができる。

II 研究の内容

¹ 川崎市立田島養護学校総括教諭

² 川崎市立川崎小学校教諭

³ 川崎市立渡田小学校教諭

⁴ 川崎市立田島中学校教諭

1 研究の手立て

(1) 誰もがわかりやすい授業を作るために

「授業のチェックリスト」によって教員が自らの授業を見直すとともに、学校全体として取り組みたい改善策を提案し、一人一人の児童にとってわかりやすい授業や教室環境を作った。

(2) 誰もが安心できる学級を作るために

「効果測定」を利用して、児童の現状理解や具体的な手立てを検討し、児童が互いに信頼し合える学級を作った。

2 研究の手順

(1) わかりやすい授業づくりのための内容と方法

地域支援チームが「授業のチェックリスト」を作成し、7月にA小学校全教員に実施した。アンケート集計結果から、学校全体として取り組みたい教室環境や指導方法などいくつかの項目を抽出し、具体的に提案した。気になる児童個々への対応に気を取られがちなか中、学級全体としての取組について具体的な改善策を示し、各学年・学級の状況に応じて取り組み、12月に再度「授業のチェックリスト」を集計し、成果と今後の課題を整理した。

(2) 安心できる学級づくりのための内容と方法

7月に「効果測定」を実施し、学級の様子を把握した。児童へのアンケートの結果をもとに、地域支援チームも加わって学年教員による校内委員会を実施し、改善のための手立てについて検討した。12月に再度実施し、次の手立てについて整理した。

3 研究の結果及び考察

(1) わかりやすい授業づくりのために

A小学校の特別支援教育推進目標に、①学級環境整備 ②指導法 ③校内研究との関わり ④取り出し・入り込み指導の充実 ⑤外部機関との連携 ⑥ケース会議の充実 ⑦研修の充実 ⑧特別支援教育委員会だより「ぽかぽか」が挙げられている。その中で、特に①学級環境整備 ②指導法に焦点を当てて、地域支援チームが「授業のチェックリスト」を作成した。⁵

授業のチェックリスト (3:できている 2:少しできている 1:あまりできていない)

項目	内容	チェック
学習環境	1. 教室内の掲示物によって気が散らないように配慮している。	3・2・1
	2. 学級目標や日課表、当番表など子どもに必要な情報が掲示されている。	3・2・1
	3. 掃除用具やロッカーなどの整理の仕方がわかりやすく示されている。	3・2・1
見通し	4. 授業のはじめに、1時間の流れと終了時間を提示している。	3・2・1
	5. 授業のはじめに、この授業の目標（ゴール）を示している。	3・2・1
	6. 1時間の授業を5～15分程度の活動で構成し、それぞれの活動の目標と手段と方法がはっきりしている。	3・2・1
	7. 1時間に学習したことを、子どもの視点で振り返る機会がある。	3・2・1
学習のルール	8. 授業の始まりと終わりをきちんと意識づけている。	3・2・1
	9. 話の聞き方、発言の仕方についてのルールが決められている。	3・2・1
	10. 話し合いの仕方を指導している。	3・2・1
興味関心	11. 授業の導入や学習課題に、学ぶ楽しさを実感できる工夫をしている。	3・2・1
	12. 子どもたちから、学習課題への問い（動機）を引き出している。	3・2・1

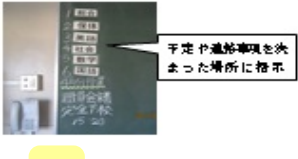
⁵ 作成に当たっては、平成22年度川崎市特別支援教育研究会議作成「子どもたちに寄り添う授業づくりチェックリスト」、国立特別支援教育総合研究所「小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究」授業の自己チェック表、東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会、小貫悟「日野市通常学級での特別支援教育のスタンダード」を参考にした。

子どもの理解	13. 一人一人の能力に応じて子どもを肯定的に受け止め、適宜ほめるように心がけている。	3・2・1
	14. 明るい表情で子どもたちに接している。	3・2・1
	15. 「静かにしなさい」「シー」と言うことなく、集中しやすい聞きたくなるような話し方で接している。	3・2・1
	16. 机間指導はすべての子どもたちに行き届いている。	3・2・1
	17. 個別のニーズを把握して、適切な配慮指導をしている。	3・2・1
ノート 板書	18. 図や写真、電子黒板、ICT 機器など視覚情報を積極的に取り入れている。	3・2・1
	19. ワークシートを活用して書字の軽減をしている。また、いくつかの書式を自由に選べるようにしている。	3・2・1
	20. 黒板のどの場所に何を書くのか、一定の決まりがある。	3・2・1
	21. 板書の文字が丁寧で、色分けや囲みなどわかりやすくまとめられている。	3・2・1
	22. ノートのどの場所に何を書くのか、書き方に一定の決まりがある。	3・2・1
発問 指示	23. 教師と子どもの一問一答でなく、考えが広がり深められる発問で授業を進めている。	3・2・1
	24. 言葉の強弱・抑揚・身振り・手振り・表情など、メリハリのある話し方で聞きやすい工夫をしている。	3・2・1
	25. 指示・説明は簡潔で分かりやすい。	3・2・1
	26. 「してはいけません」「できません」でなく、「しましょう」と肯定的表現をしている。	3・2・1
	27. 短い言葉で話し、一度にたくさんの指示をしない。複数のことを一回で指示するときは、手順を板書するなど視覚に訴える工夫をする。	3・2・1
学習 形態	28. 多くの子どもが発言する場面を作っている。	3・2・1
	29. 子どもが関わりながら学び合う活動を取り入れている。	3・2・1
	30. 一斉学習だけでなく、学習形態をいろいろと工夫している。	3・2・1

7月にA小学校全教員に実施した。集計結果(表1の7月分を参照)を参考にしながら、学級ですぐに取り組みやすいこと、学校としてノートや板書を重視していることを考慮し、学習環境(3)、見通し(4、6、7)、ノート・板書(18、19、20、22)の項目について改善策を提案した。A小学校や市内小学校での取組からぜひ参考にしたい実践を写真に撮り、冊子「どの子にもわかりやすい授業を目指して」を作成した(図1参照)。

学習環境：掲示物の工夫

◎ 学級目標や日課表、当番表など子どもに必要な情報が掲示されている。

<p>学級目標の掲示</p> <p>学級目標を掲げることにより、クラスの一員であることの自覚が芽生え、自分ばクラスのために、何をどのようにがんばらなくてはいいかを明確にすることができ、学級目標を教室の前部等目につく場所に掲示する際には、小さめにする。</p>	 <p>前部の掲示物はシンプルに</p>
<p>日課表の掲示</p> <p>今日の1日の時間割や連絡事項をきちんと表示。表示する際は授業で使う黒板とは別に、黒板のはしや、ミニ白板等を用い、一定の場所に貼る。</p>	 <p>予定や連絡事項を決まった場所に掲示</p>
<p>当番表の掲示</p> <p>誰が何をやるか、仕事の順番はどうなっているかについて、男で確認できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 日毎の仕事カードにつすつ配し、終了後交換す。全員のカードを裏返しと総が完成するようにしておく。 総裏をラミネート加工して、ホワイトボード用のペンで記録する。ナンバーが変更したときに簡単に訂正できる。 特殊の外担ごとに色分けして表示する。 仕事内容がわかりやすいようにイラストを入れる。 一人一役で責任を持たせる。 	 <p>字眼カードを裏返し</p> <p>席の枠をラミネート加工</p> <p>色分けして表示する</p> <p>イラストも入れる</p>

見通し：時間の構造化

◎ 授業のはじめに、1時間の流れと終了時間を提示している。

◎ 授業のはじめに、この授業の目標(ゴール)を提示している。

◎ 1時間の授業を5〜15分程度の窓割で構成し、それぞれの窓割の目標と手順と方法がはっきりしている。

◎ 1時間に学習したことを、子どもの視点で振り返る機会がある。

1時間の見通しをもった学習の流れ

- 授業の始めに内容の進め方について、全体的な見通しを提示する。①
- 1時間の流れを、視覚的に分かりやすいボードで示す。パソコン化された授業内容など3の項目の単元だけ完成すればよい。バウンスしたボードの裏に紙を貼ると取り替わりやすく、他の授業でも使える。②
- ミニホワイトボードは時間割や予定などを提示する時にも活用できる。
- どこまで取り組むのか、終わりをしっかり知らせる。

作業など時間の区切りが分かる工夫

- タイムタイマーの活用③ 1時間の時間が掲示される!
- 割り勘への対応の取り組みには、時間配分を目に見えるようにしたり、時間の区切りを明確にしたりすると効果的である。時間を区切って学習領域に取り組むと、集中力を高める効果がある。

見通しがもて、安心して活動できる工夫

- 総半用算数教材の大きな時計(黒板に貼るタイプ)を黒板に貼っておき、授業や休み時間の開始時に、終わりの時間を示す④
- 1でせれば シンプルな時計がよい!

今、何が行われているかわかる工夫

- 「今一するときは」カードで現在進行している課題の進捗を図る。⑤
- 「口頭分までにーをしましよ」「口頭分になったらーをしましよ」と指示をする時に、視覚的にも分かりやすいように、板が動く時計の総と指示内容が書かれたカードを黒板に貼る。子どもたちが視界の時計を見ながら自分で確かめて行動するようになってくる。



図1：冊子「どの子どもにもわかりやすい授業を目指して」より抜粋

各学級で冊子を参考にして取り組み、12月に再度チェックリストを行ったところ、学校全体として取組の数字が上がっていた（表1参照）。内訳として数字の上がっている教員が53%、数字の下がっている教員が35%、ほぼ変わらない教員が10%であったが、数字の上がっている教員も下がっている教員も、自由記入欄の記載によると様々な取組を実践している（表2参照）。

表1：授業のチェックリスト集計結果

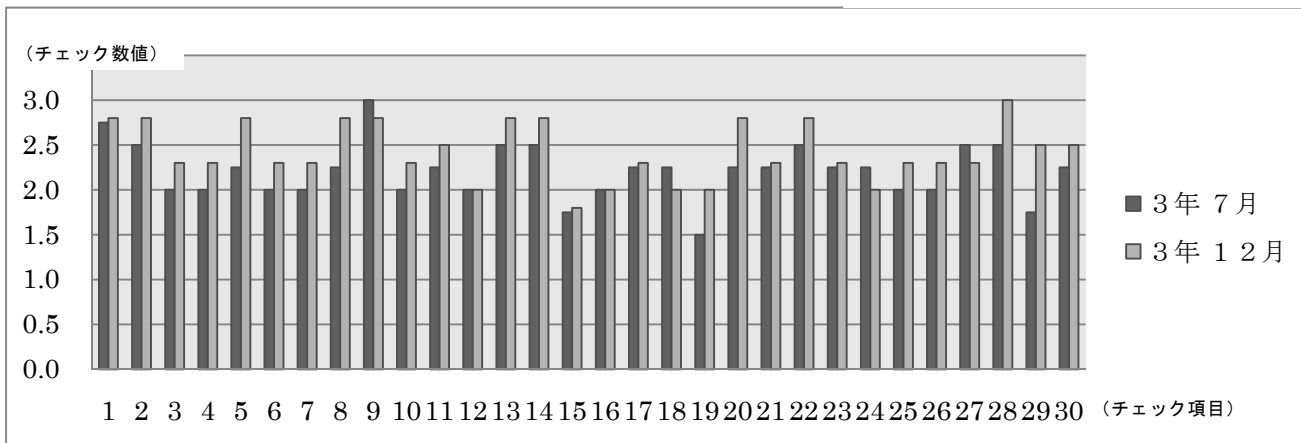


表2：チェックリスト自由記入欄の記載から

学習環境

- ・刺激のある形や色のものは、視界に入るのを防ぐため、後方に掲示している。
- ・パーティションなどにより刺激量を調整する。
- ・掃除の時、ごみを集める場所をテープで提示したり、パンチの紙を撒いて集める意味を伝えたりする。

見通し

- ・ホワイトボードで、1時間の授業の流れを伝える。
- ・授業のゴールをはじめに提示する。
- ・図や絵で手順を説明する。
- ・スモールステップを意識するようになった。
- ・約束の時間は守るように心がけている。
- ・15分程度の活動で構成するように気にかけてみたが、うまくいかない。はっきりとした目標や手段が必要。

ノート・板書

- ・ノートのどこに何を書くのかわかりやすいようにマス目入り黒板を使う。
- ・ノートを取りやすいように板書の仕方をパターン化する。
- ・図や写真、I C T機器など視覚情報を取り入れる。
- ・児童が興味を持ちやすいように黒板に掲示するものを作る。

その他

- ・授業についてこられない児童に、今何をするかのメモを渡す。
- ・大きな声で叱るのではなく、個別に具体的な方法を伝える。
- ・文章問題に振り仮名や挿絵を加える。

チェックリストの集計結果から、教員が授業や教室環境について意識するようになったことがうかがわれる。授業で何をどのようにすればよいのかについて教員の意識化が進んだ結果として、教室内で様々な取組が行われるようになったと考えられる。また、7月に多くの項目で「2 少しできている」をチェックしていた教員が、12月に「1 できている」「3 あまりできていない」もチェックするようになり、数字の増減として表れたのではないだろうか。アンケートの実施や改善策の提案だけが改善の理由とは言い切れないが、実践を振り返る手立てとして有効であったといえる。

今後、学習のルールや子どもの理解など他の項目についても、地域支援チームと学校が具体的な実践を紹介し合うことによって、よりわかりやすい授業作りにつながると考えられる。

(2) 安心できる学級づくりのために

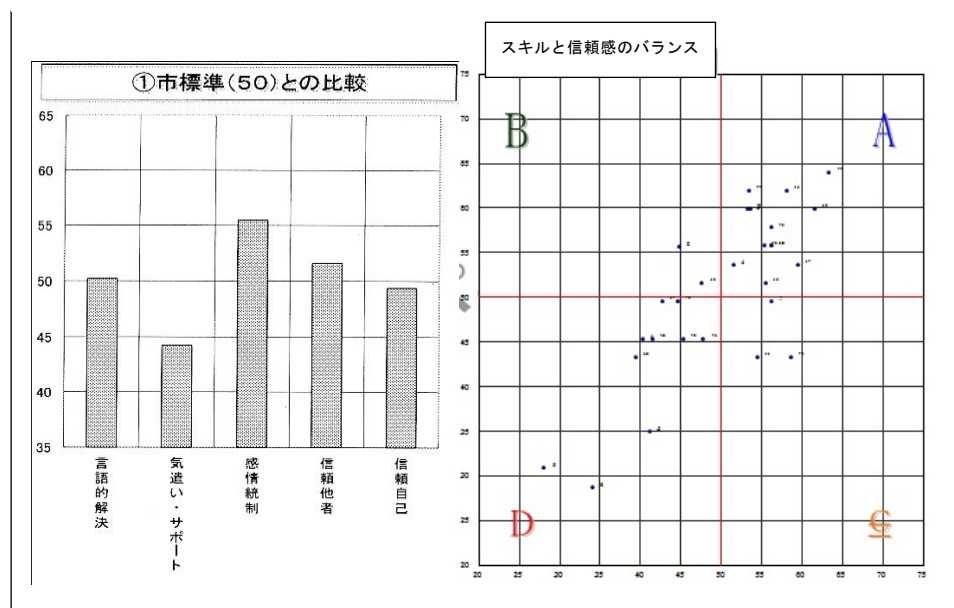
① 「効果測定」の第1回実施

学級内の個人の様子、集団の様子を視覚的にとらえることができる「効果測定」をアセスメントとして利用し、特別支援教育の観点で学級づくりについて検討することを地域支援チームが提案した。学年の教員を中心とした校内委員会で、客観的な表やグラフにより気になる児童や学級をとらえ、共通理解を持って学級経営や授業について検討した。今回は学年を絞り、落ち着かない児童が目立ち始める3年生の4学級で実施した。7月は記入方法について担任が指導しながら行い、地域支援チームがアンケート集計を行った。

② 校内委員会の実施

地域支援チームが「効果測定」に関する簡単な研修(目的、方法、特徴など)を行った後、アンケートの結果(表3参照)をもとに学年教員による校内委員会を実施した。話題を絞るため1学級を抽出し、B組の学級の特徴や課題、気になる児童などの情報を担任から得た上で、K J法を用いて地域支援チームと一緒に分析や手立てを検討した。

表3：B組の様子



分析

- ・仲の良い児童はプロット図で近くに固まっている。
- ・全体的に幼く、かまってほしい児童が多い。
- ・児童同士で助け合う気持ちが少ない。
- ・自分本位で行動する児童に対してあきらめの雰囲気がある。
- ・ルールの徹底ができていない。

手立て

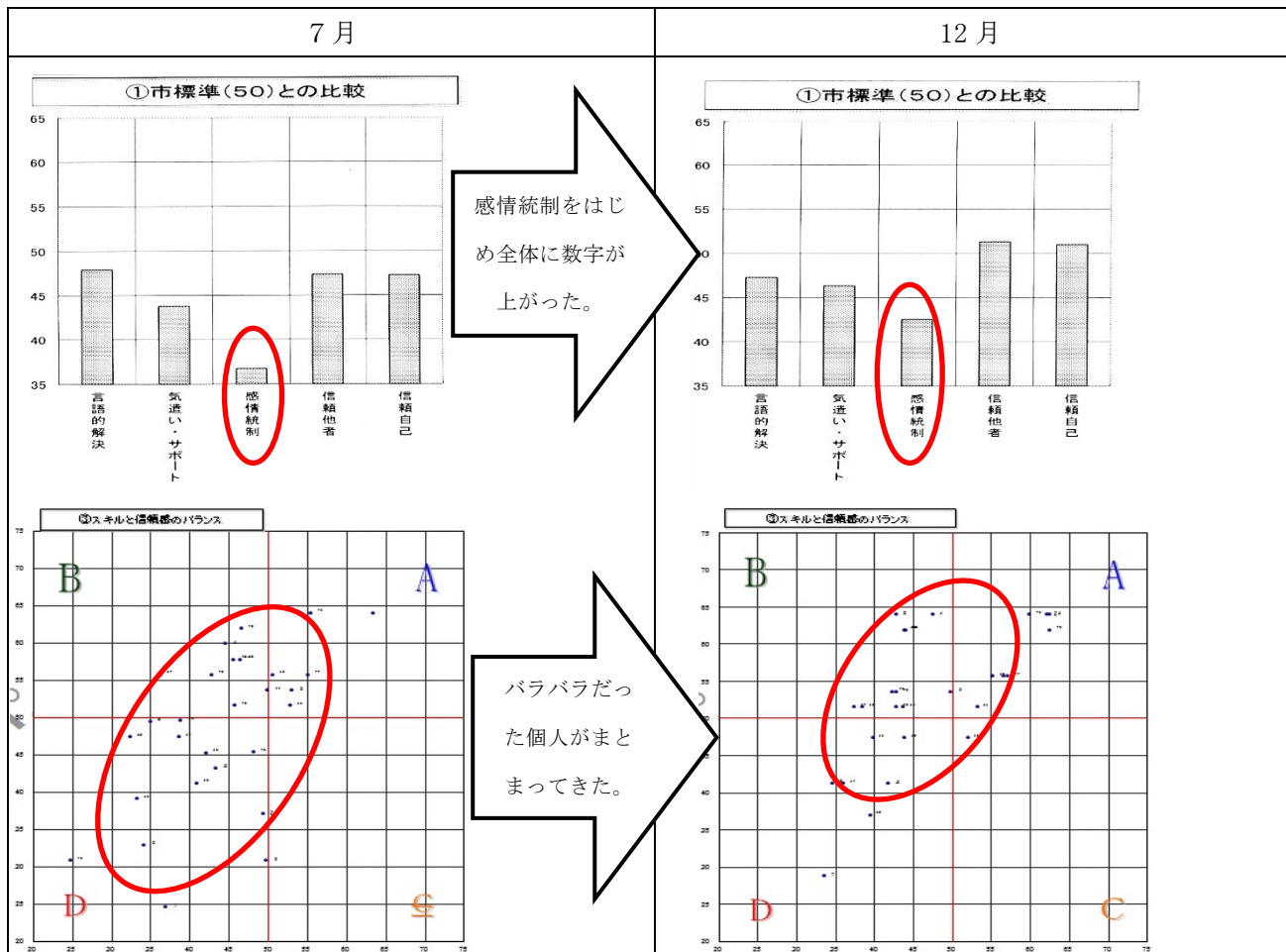
- ・ほめることを増やし、教員が児童を認める手本を示す。(例：二人組で協力し合うゲームや友達の良いところ探しを行う、作品に付箋でコメントを貼る、発言を認めるなど)
- ・学級のルールを学級全員で確認し、少なくとも簡単なルールを必ず守ることから取り組む。
- ・小グループでの学習や話し合い活動、友達同士で教えあう活動を取り入れる。
- ・気になる児童について日常的に情報交換し、必要に応じてコーディネーターなど校内の協力体制を活用する。

③ 「効果測定」の第2回実施と校内委員会

12月に再度「効果測定」を実施し、結果を参考にして1月の校内委員会で学級での実践について情報交換を行った(表4参照)。校内委員会には地域支援チームも参加した。

C組では、7月と比べて学級として少しずつまとまってきた、友達同士でとりなしたり、共感したりする姿が見られるようになってきていること、教室離脱が減っていることが報告された。表からも、7月に非常に低かった感情統制が12月には上がっていること、7月に大きく広がっていたプロット図が12月には中央に集まっていることが見てとれる。

表4：C組の変化の様子



図に現れた変化が、どのような取組によって起こったのか、各学級での実践を校内委員会で共有し

た。(表5参照)

表5：校内委員会で話し合った手立て

- ・教員が児童をほめることを心がけた。
- ・ほめほめジャンケン(友達どうしでいいところ探し)を行った。子どもたちがうれしそうな表情をしていた。
- ・小さなことからみんなで喜び合うことを心掛けた。
- ・帰りの会で教員が必ずほめるようにしている。
- ・帰りの会で児童がお互いをほめる時間を設けた。
- ・授業研究に力を入れた。
- ・全員が授業のゴール(作品や作文など)を必ず達成できるように、個々に対し必要な手立て(手本の提示、なぞり書きの用意など)を行いながら粘り強く取り組んだ。
- ・班でのグループ活動を積極的に取り入れ、掃除の後の反省会も班で行っている。
- ・授業中に挙手する児童に限られていたので、発表した児童が次の児童を指名するスタイルで発言を促した。友達の意見を受け入れる雰囲気ができてきた。
- ・8人ほどの小集団でゲーム(何でもバスケット、動物ビンゴなど)を行い、友達と楽しい経験を共有することに取り組んだ。友達への興味が育ち、友達同士で慰めたり励ましたりする姿が見られる。
- ・気になる児童について校内体制を組み、担任との関係作りやチームティーチングによる学習支援を行った。教室離脱がなくなり、約束を守るようになってきた。
- ・保護者の連携について校内体制を組む。校長は保護者がつながって保護者の安心感が出てきた。

「かわさき共生・共育プログラム」や「効果測定」の実施によって学級や個々の児童に永続的な変化が現れるわけではない。しかし、学級経営の大変さや変化が図や表に客観的に表れるため、学年集団で共感しながらそれぞれの実践を分かち合い、学びあったり、担任が気づかなかった学級の成長や変化を指摘し合ったりすることができた。また、プロット図のD群に位置する気になる児童について、担任以外の情報を得ることができた。

「効果測定」を用いることにより、担任一人が頑張るのでなく、情報を共有しながら実践を振り返ること、学級づくりのための手立てや一人一人に対する支援についてお互いに助言することができた。「効果測定」が話し合いの道具として有効であったと考えられる。

集計の作業をする中で、児童の記入の様子にも変化が見られた。1回目のアンケートでは、全項目同じ数字を機械的にチェックしたり、迷ったためか数字と数字の間にチェックをしたりする児童がいた。2回目のアンケートではいろいろな数字をチェックしたり、消しゴムで消して直したり、あいまいな場所でなく数字をチェックしたり、自分がどこに当てはまるのか一生懸命考えて答えようとする様子がうかがわれた。自分をより客観的に見つめようとする成長が感じられた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 仮説の検証

授業づくりについて、「チェックリスト」の実施によって教員の意識が高まったことは集計結果から推測される。地域支援チームが作成した「わかりやすい授業のために」の冊子は、学校内の実践を含むものであり、時間と労力をかけなくても、身近なところで互いの実践について情報交換を行い、学び合うことができることがわかった。情報交換した内容について冊子にすれば、より広く共有することが可能である。地域支援チームの作成した「チェックリスト」や冊子が教員の意識の向上や実践の学び合いにつながったと考えられる。

学級づくりについて、より有効な支援や手立てを考えるために「効果測定」を利用して、学級や個々

の児童の抱える課題を客観的にとらえ、その課題を学年や学校で共有しながら話し合った。地域支援チームが校内委員会に加わり、個や学級への手立てを助言し、教員同士学び合うことができた。

2 今後の課題

地域支援チームは、ブロックごとに設置されているため、学校のニーズに合わせた柔軟な対応ができ、学校にとって身近な外部支援である。特別な支援が必要な児童についての見立てや手立てについて学校とともに考え、個への支援を具体的に助言することができる。また、今回報告したように、学校全体の特別支援教育を引き上げるために、校内委員会に参加して学校の課題を整理したり、校内の体制作りについて検討したりすることも可能である。

地域支援チームの活動は、地域割りなどを少しずつ変えながら3年目となるが、川崎市全体から見るとまだ一部の学校の活用に留まっている。学校のニーズに柔軟に対応できる地域支援チームの活用を、今後さらに広げていくことが課題である。

最後に、本研究を進めるに当たりご協力いただきました先生、ご支援ご助言をくださいました講師の先生方、また校長先生をはじめ学校教職員の皆様に心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | | |
|----------------------------|---|-------|
| 河村 茂雄 | 『Q-Uによる学級経営スーパーバイズガイド小学校編』図書文化 | 2004年 |
| 月森 久江 | 『教室でできる特別支援教育のアイデア172小学校編』図書文化 | 2005年 |
| 河村 茂雄 | 『Q-Uによる特別支援教育を充実させる学級経営』図書文化 | 2006年 |
| 笹森 洋樹 他 | 『小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究』国立特別支援教育総合研究所 | 2010年 |
| 東京都日野市公立小中学校全教員・教育委員会、小貫 悟 | 『日野市通常学級での特別支援教育のスタンダード』東京書籍 | 2010年 |

【指導助言者】

- | | |
|--------------------------------|-------|
| 群馬大学教育学部准教授（川崎市総合教育センター専門員） | 霜田 浩信 |
| 川崎市教育委員会総務部教育改革推進担当共生＊共育担当指導主事 | 小川 俊哉 |